

平成27年度第2回福島県総合教育会議 議事録

1 日時	平成27年10月22日(木) 午後1時～午後2時10分
2 場所	杉妻会館 3階 百合
3 出席者	<p>知事 内堀 雅雄 教育委員 高橋 金一 蜂須賀 禮子 浅川 なおみ 小野 栄重 佐藤 有史 杉 昭重(教育長)</p> <p>その他(意見聴取者) こども未来局長 尾形 淳一</p>
4 議事内容及び経過	
(1) 開会	事務局(政策調査課長)
(2) 議題1	<p><学力の向上について></p> <p>資料1-1、資料1-2及び資料2に基づき、教育長が説明を行った後、以下のとおり、協議、意見交換を行った。</p> <p>【知事】</p> <p>資料1-1は、27年度の福島県のデータと全国のデータを比較しているものだが、これについて二つ確認したい。一つ目は、比較的良かった26年度に対して27年度が良くなかった分析と理由。二つ目は、震災前の学力テストは27年度に比べると、どのような傾向だったか。</p> <p>【教育長】</p> <p>まず、二つ目の震災前の傾向だが、国語に関しては全国平均よりも少し上、数学に関しては全国平均より下という状況であった。</p> <p>次に、一つ目の26年度との比較だが、小学校の国語A以外は全ての教科で悪くなっている。テストを受ける生徒は毎年変わるので単純に比較できないが、相対的には前回よりも成績が下がっている。理由について、明確にはつかめていないが、いずれにしても、教員の指導力、これをもっと上げなければいけないと思っている。</p> <p>【知事】</p> <p>震災や原発事故により避難生活を送っておられるお子さんたちがいるが、そのような影響ではなく、年毎に一定のバラつきが出るということか。</p> <p>【教育長】</p> <p>震災の影響もあると思うが、地域的にいわき、相双が低いとか、会津が高いということではなく、県全体で同じような傾向を示している。</p> <p>【事務局(教育庁)】</p> <p>震災以前と以降の学力の傾向だが、小学校、中学校ともに震災以前は、全国平均に近い数値で推移していた。震災以降は、年によって、全国平均を下回る年と、全国平均に近い数値の年があるなど、年によって差が見られる。これが、震災や原発</p>

事故による影響なのか、教員の指導力などによるものなのか、今のところ明確な原因はつかめていない。ただ、どのような状況にあっても、子どもたちの学びは保証しなければならないという観点から教員の指導力向上は最も求められるもの。

【知事】

それでは、意見など順次発言をお願いします。

【教育委員】

福島県の子どもたちの学力が伸びない原因の一つに、分からないところを、そのままにしてしまっているというのがあると思う。例えば、6年生で、4年生の勉強までしか分からないのに、6年生のことをやらされても分からないというような状況がある。一方、分かっている子どもたちは、足踏みしていなければならないという状況もある。分からない子どもたちをどのように引き上げていくか、また、分かっている子どもたちを更に伸ばしていくためにはどのようにすれば良いか。これらにしっかり取り組むことができれば、県の教育水準を上げることにつながると思う。そのためは、先生たちが、分からない子どもたちに分かるまで教えてあげようという熱意を更に持つことが必要だと思う。

もう一つは提案。学力テストの順位について、今は44位だが、いきなり20位まで上げるということでなく、毎年2県ぐらいは抜いていこうというように、地道にやっていくのが大事なと思う。

【教育委員】

やはり学力テストの結果を上げるためには、基礎学力を定着させ、ボトムアップを図るというのが必要。全体的なボトムアップをした上で、できる子どもたちを更に伸ばす方策が今後必要になってくると思う。テストを受けるに当たっては、授業の中で学力テストの問題に触れておくことが良い。傾向と対策ではないが、その方が点数は違ってくると思う。しかし、単に点数が良くなった、良かったねということではなく、長期的な視野に立って、思考力の使い方や表現力の仕方なども指導していただくのが大事だと思う。

また、視点を変え、親の立場というところでは、やはり、学校行事に参加する仕組みづくりも必要かなと思う。例えば、学校の行事に参加するに当たって、経済的な面から支援できるような仕組みができれば、より地域と家庭と学校という、つなぐ教育が強化されると思う。子どもの教育も重要だが、親の教育も重要だと思う。

【教育委員】

私も今の意見に賛成。私の会社でも、学校行事に参加した次の日には、職場での会話が多くなる。とても良いことだなと思う。

また、学力については、子どもたちのがんばりも必要だが、やはり先生方に一生懸命頑張ってもらいたいと思う。資料にもあるとおり、どんどん他県の先進地にも行ってもらって、良いところを取り入れてほしい。

【教育委員】

算数・数学について、中学校に上がると成績が落ちるとするのは、どのような原因があるかと考えてみたが、算数・数学は積み重ねが大事であり、一度どこかでつまずくと、その後は分からなくなってしまふ。極論になってしまうかもしれないが、中途半端に応用問題をやるよりも、基礎的な問題を、例えば小学校5年生ぐらいか

ら徹底的にやる方が良いと思う。それをやって初めて、応用問題の結果も上がってくると思う。そうすることで子どもたちの自信につながってくる。今の子どもたちの中には、勉強ができなくて、自信をなくしてしまっている子もいる。私は、勉強に付いてこれない、分からなくて学校に行きたくないという子を救ってあげるのが、教育であると思う。

【教育委員】

教育委員会で議論する中で、学力テストの成績を上げるために、テスト対策を一生懸命やっている都道府県があるという話を聞いた。短期的には成績が上がるだろうが、それは、必ずしも子どものためにはならないので、学力テストの結果どうこうではないというところは押さえておかなければならないと思う。

そのような中でも、今回、全国平均との差が昨年度に比べて開いてしまったというのはやはり問題だと思う。ただ、震災後であっても、平成24年の時は全国平均との差はそれほどなかった。先ほどの教育庁からの説明では、震災の影響ははっきりとは分からないということだったが、震災の影響で落ち着かない日々を送っていた子どもたちの状況を考えると、影響は否定できないと思う。

また、点数が落ちた算数などは、一度分からなくなってしまうと、授業に追いつくのが難しいということがある。そういう中でも、成績が伸びるのは、やはり先生の指導力によるところが大きい。このようなことから、先生の指導力向上というのは非常に重要であると考えます。これまで、他県の先進地に管理職が行くということはあるが、現場の教員が行く機会はなかった。今回の取組は知事の言う「現場主義」にも通じるものであり、現場で学んだことを、現場に還元できるという、とても良いことだと思うので、是非、力を入れてやっていただきたい。

前回の教育委員会でも会津藩の話をしたが、司馬遼太郎によれば、封建制なので、会津藩というのは、武士の秩序が最も完成された藩だったと言う。その中心は何だったかという「教育」。地方の警護を命ぜられた時には、行った先に必ず学校を作るなど、それだけ教育に金をかけていた。このようなことからしても、今回の先進地研修のような長期的な視野に立った新たな事業はしっかりと取り組んでほしいと思う。

【知事】

研修では秋田県や福井県に行くわけだが、学校以外に、地域や家庭に行って、交流する機会などはあるのか。

【教育長】

今のところは予定していない。

【知事】

できれば研修の中で、地域や家庭と意見交換する機会を設けたら良いと思う。私は福井県庁にいたことがあるが、放課後教育など非常に先進的な取組をしている。藩校教育がものすごく熱心なところであり、すごくプライドを持っている。せっかく「つなぐ教育」に取り組む以上は、学校現場だけではなく、地域や家庭と交流を持つなどすると、より広がりが出てくるのではないかと思う。また、今後もこのような取組は継続されていくと思うが、広がりを持って現場を見るのが非常に大切である。

やはり、子どもたちの学力向上のためには、まず、教員の指導力向上に向けた取

組の充実が重要だが、今申し上げたとおり、学校だけではなく、地域、そして家庭、こういったつながり全体の協力で子どもたちを支えていくことが必要である。そういう中で、福島ならではの学力向上の在り方というものを引き続き議論して、形にしていかなければならないと思う。

(3) 議題2

<平成28年度に向けた教育、子育てにかかる連携について>

資料3、資料4及び資料5に基づき、教育長、こども未来局長が説明を行った後、以下のとおり、協議、意見交換を行った。

【知事】

意見など順次発言をお願いします。

【教育委員】

読書率は高校生になると極めて低くなる。これは、クラブ活動やゲームに時間を取られて時間がない、また、入試と関係ないので、本を読まないということが考えられる。読書は全ての基礎になる非常に大事なものだと思う。読書をすることで想像力やひらめきが生まれる。これが学力テストの結果に如実に出ていると思う。応用問題が弱くなってきている。想像力やひらめきは生きる上でも大事な資質になってくることから、こども未来局と連携を密にして取り組んでいく必要がある。

放課後の児童支援については、もっと早く取り組んでも良かったぐらいの事業だと思う。費用もかかると思うが、子どもの学力、体力の向上にもつながる事業なので、是非実施していただきたい。

医療の担い手育成についてだが、先日、知事とお話した時に、震災後、子どもたちの道徳観が大きく変わったという話をした。「お医者さんになって困っている人を助けたい」、「看護師になって何とかお年寄りを助けたい」ということを作文に書く子どもたちが増えてきた。このような思いを形にしてあげることが必要だと思う。それには、医大などとも連携しながら、中学生から高校1年生、2年生の時期からモチベーションを失わせないように施策に取り組んでいく必要がある。また、いわき市では、商工会議所と教育委員会が連携して、子どもたちのキャリアアップのための取組を進めている。優秀な志を持った子どもたちを民間と共に育てていきたいと思う。

【教育委員】

私も読書というのはすごく大切だと思うのだが、その中に英語の本も入っていれば良いと思う。小さい頃から英語のある環境が整っていることは大事。

医療の担い手育成については、福島県の子どもたちが、もっと医療に目を向けるような教育をしていく必要があると思う。

最後に放課後支援について、資料の中に、大学生がサポートティーチャーになるというところがあるが、これは大学生が学校の先生になるための勉強にもなると思うので、是非実施していただきたいと思う。

【教育委員】

まず読書について、今「ブックスタート」という取組が定着しつつあるが、これは非常に良い傾向だと思っている。先ほどの話にも出たが、読書は想像力などが養われ、そこから、自分のことを考えるきっかけにもつながっていくと思う。成績の良い子は本を読んでいるというのも統計にあったかと思うので、読書はどんどん続

けて行ってほしいと思う。

次に放課後支援については、今後、更に共働きや女性が活躍する機会が多くなってくることから、このような取組は是非続けて行ってほしいと思うし、必要があれば、より多くの所に設置していくべきだと思う。

医療の担い手育成について、大変重要なことだと思う。このようなことを子どもたちに経験させることによって、医療という大変な環境にもチャレンジしていくと思う。

【教育委員】

読み聞かせやブックスタートでは、誰にも負けないぐらい自分の子どもにやってきたつもり。子どもたちが大きくなって、あれが一番良かったと言ってくれる。ただ、それによって、学校で先生が求めていることをやってしまったこともあるようで、やり過ぎも良くないかなと思ったりもする。母国語教育とも関係するが、子どもたちにきちんとした日本語を身に付けさせるためには、それを教える親の役割が重要。親の教育をしっかりしないと子どもの教育にはつながらないと思う。

医療の担い手育成について、大学進学にかかる推薦には人数の枠があるが、学力のレベルが低い年でも一定の枠まで入れなくてはならないということがある。その年のレベルによって、もう少しうまく調整できたらなとも思う。また、私の知り合いでも、看護師になりたいという人がいるが、「福島医大よりもちょっと高いレベルのところに行きたい」と言っていた。若者を県外に流出させないためには、福島の大学のレベルを上げることが必要であるし、そのためには、小さい時からの教育が重要になる。小さい時から医療の担い手になることを意識するような取組をお願いしたい。

放課後支援について、これは、ずっと待ち望まれている部分だと思う。他の県よりも上に行くぐらい、力を入れて取り組んでほしい。

【教育委員】

皆さんからいろいろとお話ありましたが、読書の大事さというのは、皆さんの共通理解だと思う。資料にもある、私が以前から注目しているビブリオバトルだが、高校生を対象として書評合戦をするというもので、これを一つのきっかけにして、例えば、この様子をテレビ中継するとか、それが親に対して読書の興味を持たせる、それが子どもにも伝わるというように大きな広がりにもなるのではないかと考えている。

医療の担い手育成について、震災以降、人材が少なくなっているということだが、ある病院では若い先生がいなくなり、高齢の先生しかおらず大変だという話も聞いている。県内の高校から福島医大に合格する生徒が毎年かなり減っているという話を聞いて、正直とても驚いた。しかし、子どもたちの作文などを見ると、医者になりたいというのをよく見かける。そういう芽を摘まないためには、奨学金制度の拡充など、医者を志す子どもたちが経済的負担を考えずに勉強できる環境を整え、地元で医師を呼び込むための取組を進める必要がある。

放課後支援については、非常に大事なことだと思う。昔は兄弟や祖父、祖母が家において、近所にも子どもがたくさんいたので、親がいなくても過ごせたが、今は核家族化が進み、子どもの居場所がなくなっている。このような事業を拡充していくのは、非常に大事だと思う。また、この中で、大学生によるサポートがあるが、こ

れをもう少し大きく展開できないか。福島県の教員採用試験で応募者が少なくなってきたおり、教員に対して、魅力がなくなってきたのではないかと考えている。他の都道府県でも同じような問題を抱えており、教員志望の学生に対して、モチベーションを高めるために、学校の現場を見せるなどの活動をしているところもある。今回の放課後支援における大学生の関わりも教員を目指す良いきっかけにもなると思う。

【知事】

皆さんから様々な提言を頂いた。今回は三つの項目を特に取り上げて、知事部局と教育委員会との連携にかかる取組を進めたわけだが、非常に意義のあることなので、引き続き、密接に連携し、取り組んでほしい。

少し角度を変えて、一つだけ問題提起をしたい。読書の問題や学力向上にも関わる問題だが、福島の子どもの時間をどのように作るかということ。我々の世代は、今の子どもたちの状況とまったく異なり、IT社会ではなかった。今の子どもたちはIT社会のど真ん中にいる。例えば、昔もテレビゲームはあったが、今はオンラインゲームが当たり前。スマホを持っている子どもは小学校高学年から当たり前にて、ツイッターやフェイスブック、LINE、インスタグラムなど、様々なことをやっており、子どもたちのそれらに関わる時間の割合が非常に増えてきている。また、親がそれらを取り上げると、その間、友人とのやりとりができず、関係にヒビが入るといようなこともある。勉強するとか、読書をするとか、家族との会話をする以前に、自分の時間を持てなくなっているという現状があるのではないかと危惧している。このような状況に対し、教育委員会と知事部局、例えば情報関係の担当部署である企画調整部なども入れても良いが、福島の子どもたちは、どうやってこのIT社会の中で、そういうITツールと付き合いっていったらいいのかということを実際に掘り下げて議論をしていくことも必要ではないかなと思う。自分の自由な時間がなくなれば、勉強もできないし、読書もできないし、親御さんとの会話もできない。ある程度実態を把握することも必要なので、すぐに結論を出す必要はないが、そういった点をしっかりと考えていくことが重要だと思う。ITを遮断しろということではなくて、ITと賢く付き合わなければいけないので、このほどほど感をどのようにしていくかということも、今の時代ならではのテーマだと思う。こういった議論を深めて、または、始めていくことも必要だと考えている。

以上で本日の議題をすべて終了した。非常に実りの多い協議ができた。是非次回の会議に今回の議論をつなげていき、皆さんと共に「ふくしまの子どもたち」をしっかり育てていきたいと思う。

以上で、第2回総合教育会議を閉じる。

(4) 閉会

午後14時10分閉会となった。